LIBRARIES
UNIVERSITY OF WISCONSIN–MADISON

蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 4] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

https://digital.library.wisc.edu/

http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

728 State Street | Madison, Wisconsin 53706 | library.wisc.edu

蝦夷風俗彙纂後編

四

CHESTER S. CHARD

蝦夷風俗彙纂後編巻四目次

○耕漁
稗蕪菁類耕作の事
麻を作る事
夷女畑作の事
キナ並厚子を織法の事
夷女厚子皮を製する事
ツキサニを製し紡績する事
鮭鯡等漁業の事
川漁ゟ犬を使用する事

イシヨニを以て海豹を捕る事
ヤスを以て魚を突く事
牡父魚を捕る事
腽肭臍漁の事
キナンボー魚を漁する事
蝶鮫の事
漁獵時節の事
昆布刈時の事
氷海漁獵の事

○獸獵

他郡山獵の事
桶を以て狐を捕る等事
夷女獸獵の事
穴熊を捕る事
鷲を捕る事
夷家鳥獸を飼ふ事
山獵ゟ犬を使ふ事
鹿種類の事
唐太産業ゟ事
唐太産業ゟ犬を使ふ事

蝦夷風俗彙纂後編卷四目次終

蝦夷風俗彙纂後編卷四

○耕漁

○稗蕪菁類耕作の事

夷人は食を。鳥獸魚は肉を專らに用ふといへども。不毛の地にして。禾穀の類はたえて生ぜる事なしといふにあらず。亦禾穀は類をたえて食せる事なしといふにもあらぬ。こゝにアユウシアマヽといふものあり。はるかに稗の一種にして。烏禾は類なり。是を蝦

夷の内。何きの地よりても作りて。糧食に一助となる事あり。

但極北に地。根室并國後島などの夷人のごときも。かゝる物作る事のならぜ。是そひとしく蝦夷地なりといへども。殊よ邊辟たるよ。その闢(ヒラケ)たる事もおそくして。未ざかゝる物など作るべきわざハ。えるよ及バざるゆゑなり。絶て禾穀の類に生ぜぢる地といふよハ非ぜ。さでよ本邦の人に行て住居さるもに。麥のるゝ菜大根等を作るよ。よく生熟さる事れり。

其アユウシアマヽとハ。アユを刺をいひウシを在る
我いひ。アマヽを穀食の通稱ふして。刺ハなる穀食と
いふ事なり。六の稗ハ穂ふを。刺の多くなる故ふ斯を
いへるなり。夷人ハ傳言をるところハ。六の國闢けし
をじめ。天より火ハ神降ヲ給ひて。此種を傳へたまへ
り。そをよりしてかく作る事ふをなりたるよしなり。
然る故ふ是を尊ぶこと大かさならば。其作り立るふ
り。食をるふ至るまでハをざ。ことふ心我用るなり。其
委しくハ次々ふいふ。是より出たる糠といへども。み
だヲふをる事ならぜ。其捨る所を。家の側ふ定め置。ム

ルクタウシカモイと稱して。神明の在るところとれし。尊みたく事なり。此稗を奥羽兩國及び松前の地ふてゝ。まれふ作るものゝうて蝦夷稗と稱せ。外の穀類ふゝ似ぜ。地の肥瘠ふかゝそらぶして。よく生熟し荒凶の事れしといつり。其蝦夷稗と稱せる事ゝ。本邦れ地ふゝなきものふて。蝦夷れ地より傳つ來るふより。かく稱せるといふ事ふそなるべのらば。是我本邦禾穀れうちふかんづふるふ。今いふ田稗なるべし。田稗といつる物ゝ。田のみふ限らぶ。せべて庳濕の地ふゝ。植る事をまゝぜして生熟せるものなれば。今れ世

の人々だによのつゐは野草と同じ事はやうゐたぼえたる事なりされど上古のとは禾穀の類はいまゞ豐饒ならざるしゐゑはれらの類をも作ゑ用ひたる事なるべし其後禾穀は類ゆゑらゐなりしより自らこれらは類をも麤細なるものとして作る者もおくだゞ奥羽ならびゐ松前等の邊地ゐてはみ稀ゐ作る事ゐもなりたるとみもなり蝦夷稗は名を得たる事も今ゐ及びてもつぱら蝦夷は地ゐてはみ作ゑ用ふる事ゑりしてだのづからかゝる名をば唱ふるなるべし其形のごときまさしく田稗と露たゞふ事なし

といふゝならねど。おきな人は手をよりて。其生熟は性を遂るとたゞ原野荒草はうちを混じて生ぜるをよりて。自ら形を少しくかをれるさまはなるべし。ちゝりといつども。ひとしく稗は一種をして。本邦は地をても生じ。蝦夷は地をも生ぜといつる事を。いさゝか疑ふべき事をならば。是のみを非ぜ。近き頃を至りてハ。蝦夷はうち極北は地をならざるところを。粟稗大根菜等を本邦の人より傳へて。作る夷人ことを多し。

蝦夷のうち。尻岸内といふ所より。沙流といつる所

までの夷人ども。ことゞく作る事なり。
是を糧食に供せる事も。よのつねの魚鳥の肉等に。比せべきものにハあらぬといひて。其尊び重んぜる事甚厚し。凡そきらの事によらんにも。いかんぞ蝦夷の地にも。禾穀は類の生ぜる事れく。蝦夷の人も禾穀は類を。食せる事なしとやハ云べき。
ラタネと稱せる事も。ラタツキ子といへるを略せるの言葉なり。ラとも。せべて食せる草は根をいひ。タツキ子とも短き事をいひて。根短しといふ事なり。是も此草は形によりてかくも稱せるなり。是亦國は開け

し初め火の神降りたまひて。アユウシアマヽと同じく。傳へ給ふよしいひ傳へて。殊の外ふ尊み。蝦夷のうち何きの地ふても作りて。饉食ハ助けとなき事也。

但極北ハ地。根室并國後島等の夷人作る事のなきゑ。アユウシアマヽふ論じたると同じき故とゑるべし。

是我本邦菜類ハ内ふ考ふるふ。則蕪菁ハ一種あり。食きるふ根葉とゑふ用ふる事。全く蕪菁と異なる事なし。味ゑ又同じ。夷人のいひ傳ふる所ゑ。此菜ゑよのつねの草とハ事かゑりて。聊ら毒ハ氣れしとて。疾病の

人といへども。此菜に限りても心を置ざして。食せしむる事なり。さべて蝦夷にうち極北の地にのらざるあひだは。土地の美惡にかゝはらば。作りだにされば。よく生熟せる事なり。多く作る事ものらんにも。荒凶にとしに備へとなさんも。便りれるべし。

右に二種ゝ蝦夷に開けし初めより。自然に生じたる所にして。外より傳ハり植さる物にゝ非ず。此うちアユウシアマ、ゝ。穀類に一種にして。ラタ子ゝ菜類の一種なり。是によりて考ふるに。後來に及び人民蕃殖し。耕耘に力を致し。稼穡に務を盡さ事の

るゝ至らんゝゝ。禾穀菜草は類森然として。蝦夷は地ゝ生せん事も。未ゝるべからず。

右二種はものをつくるを。をべて稱してトイタといふ。トイを土をいひ。タをほる事なりいひて。土地堀るとゝ云ふ事なり。又一つゝゝトイカルとゝいふ。トイを上ゝ同じく。カルを造る事をいひて。土を造るといふ事なり。二つとゝゝ本邦の語ゝして。をなほ耕作などいそんごとく。まゝ塲圃(チヤウホ)(ハタケ)などいそんゞ如し。

耕作と塲圃とを。殊ゝかをりたる事なるをかくいつるものを。をべて夷人は境上古はさまゝして。言

語のかぎも多からば。爲すべき業もまゝ少し。志のるゆゑよ。この二種のものをつくるごとき。其作を立るに事業をも稱して。トイタといひ。其作る地よして。場圃にさまゝたるところをも。まゝ稱してトイタといふれり。凡さきらに事。本邦の事に比してい。論ず難きとこ説れり。是より後其言葉を一よして。其事にたゞひなる事ハ。皆この故と志るべし。夷人のならひ。それらに事をなせよ。地の美惡をえらぶなどいへる事を見えず。山中の不平なる地。なるハ樹木に陰れとをも。トイタとれ〻てつくる事なり。

但地をえらぶ事はなしといへるハ。さだのなる事
よりならぬ。外より打見たるさまをかくみゆるとも。
をべて夷人は性を物事深くかんゞへて。かろ〳〵
しき事ををせぬ。されバ此等は事よりも。別ふ意味の
ありてかくをなせるよや。其義いまゞ詳ならぬ。
トイタとなをべきためよ。まゞをじめよ其地は草を
かる。是をムシカルと稱を。ムシを草をいひ。カルをを
れをち刈事をいひて。草をかるといふ事なり。をべて
このトイタは事を。初め草をかるより種を蒔其外熟
をるよいたりて。苅をさむる等は事ふ至るまで。多く

は老人は夷なるハ女子の夷は業とせる事なり。
草をかるよりまゐ其所よイナヲをさゝげて神を
祭る事なり。其外種をまくは時なるを熟せるよ及
んで刈収るの時等ハどゝく神を祭るの事なり。い
まだ其義を詳ならず。
苅たる草をバ。そのところよりめ置て火ふ焼れり。
是をムンウフイと稱せ。ムンを草茂いひ。ウフイをや
く事をいひて。草をやくといふ事なり。ハれハ草をや
きて。地のこやしとなれといふなるならぜ。たゞかま
たるまゝよせて置てを。トイタのさまたげとなるゆ

ゑふかくなる事なり。あし刈る所の草纔らなる事なれば。そのまゝ其地はかさいらふ。さて置事もあるなり。

草を燒てより。其地の土を平らのふならはなり。是をトイラ、ツカと稱す。トイを前ふ同じくラ、ツカとは。さべて物を平らのふする事をいひて。土をたひらかふならはといふ事なり。夷人は境耒耜等は器もなければ。地をならすといつるも。本邦ふて隴畝など。耕作するがごときは事ふをならず。唯其地ふなる木は根。なるを土くき等は物の種を蒔さまきげとなるべ

きものを。タシロ等はものゝて。きり除くのみは事なり。

タシロといへる物も。本邦ゝいふ庖丁は類なり。土をならはせ事終りて。夫より種を蒔なり。是をヒチヤリパと稱せ。ヒをせべて物の種をいひ。チヤリパを蒔く事をいひて。種をまくといふ事れり。凡トイタは事。地の善惡をえらぶといへる事も見えぜ。まさこやしゐど用ふといふ事もなければ。たゞこの種を蒔事は殊ゝ心をもちひて。時節をかんがふる事なり。其時節といへるも。ととより暦といふものもなけきば。時

日をいつの頃と定め置といふ事ハそなハらぬ。唯ふりつみし雪ハ消行まゝハ。山野ハ草ハおハづゝから生るをうかゞひて。種を蒔の時節とそなぬ事なり。

ぬべて夷人の境時候ひとしからぬ。寒暖ハ遲速ハよりて。種を蒔の時節もまさかをまぬ。まゝおわよそそ。本邦ハ時節ハていそんハそ。四月ハ半より五月ハ半ハのさるべし。

種を蒔とハいへども。たゞ地上ハうち散らしたるハみよて。土を覆ふといふ事もなけぬバ。雀などハ小鳥ひろひ喰ひくるハより自然生ハちましたるなり。

其まき置たる二種ハもの〳〵芽を出せしより。其たけもゆ〳〵のびさる頃ふ及び。其間ふ野草の交ヲ生じて。植しもの〳〵さそりとなるゆゑふ。其草ハ抜ハつる事有。これをもムンカルといふなり。されバ前ふいふ草を刈とゝ〳〵の草を除くと。其そけをたゞひてゆきども。上ふ論ぜる如く夷人ハ言語をかぞ少くして。物をかゆていふ事ハあるゆゑゝ。さきらの類もひとしくムンカルとハみ稱ぜるなり。本邦ふて禾菜ハ類を作るふゝ。おろぬくといふ事ゆりて。蒔さる種の一つふ叢生したるをバ。其間をぜのし。長〳〵易らん事をそら

りて。ぬきさる事などなれど。夷人は生るところハ。いさ〳〵このさゆうの事もあらじ。唯野草などのそびこまる生ぜる事なれば。そきをぬきさるのみ。ふて。其餘をたゞ生じたる儘ふして。打ぜて置とも自然とよく生熟ぜる事なり。

アユウシアマヽの熟ぜる時ハ及で。其穂をきらんゞ爲ハ。手ハ貝を付るなり。これをテケヲツタセイコトクといふ。テケを手は事をいひ。ヲツタハ何ハといふにの字は意なり。セイを貝をいひ。コトクを附る事をいひて。手ハ貝を附るといふ事なり。

爰ニ用ふる貝を。夷語ニビバセイといふなり。それを小刀を磨ぎる如くニ。よくとぎて手ニ附るなり。凡穂をきるニを。ゑ是を用ひてきる事なり。決して小刀ようナ物。ぎべて刄物を用ふる事をならぎ。奥羽両國ナうち。まれニハ穂をきるニ。右ナごとく貝ナ用ふる事も。なるよしをいつり。

手ニ貝をつけて。アユウシアマヽナ穂をかる事を。ウフシトイといふ。ウフシを穂ナ事ナいひ。トイを切る事をいひて。穂をきるといふ事なり。もとより自然ニ生じたるごとくニ作ぎたる事故。其たけの長短もひ

としからば。穂は熟せる事もまゝ遲速の不同ありて。残らず熟せるをまちて収めんとせるゆへ。早く熟したる穂も實の落散るもあり。或は鳥などの爲ゆ喰ひ盡さるゝ事ありて。其損失殊ゆ多し。されば故ゆ大概ゆ熟せるを待て。實は皆ゆ不同ある事を。論せずして切とるなり。其切取しから及び根等も。其儘ゆ捨置ね。來年ゆ至りてまゝ其地ゆ植んとせる時も。それを抜去りて燒せつるなり。

此穂をきるはときは。だゐよそ八月は半より。九月は半ゆもあるべし。

剪採し穂を収め置事を。プヲツタシツカシマといふなり。プとも本邦ふしても藏などいへるもの〳〵如く。さべて物を貯へ置所をいふ。

其造るさまも常ハ家とハ事かをりて。いらふも床を高くかしして。住居より引をかきこる所ふ造り置事なり。

オツタも前ふいふごとくふ。にの字ハ意なり。シツカシマとも。大事ふ物を収め置事をいひて。藏ふ収め置といふ事なり。其収め置ふハ。サラニツプといへる物ふ入て置もなり。あるも俵ハごとくになして。入置も

なるなり。

サラニツプといへるも。草ふて作る物なり。俵ふもるといへるも。多くハ夷地のキナといへる物を用ふなり。此中來年ハ種よなきをたくさへ置ふも。よく熟したる穂をえらび。莖ハ切つけてきり。よくたゞ束て苞となし。同じく藏ふ入置なり。

是よてまづアユウシアマヽを。作り立るハ業ハ終るなり。さべてこれまでの事平易ふして。格別ふ艱難なるさまもなきやうふ見ゆ。ども。殊ふ然るふならば。夷人ハ境よろゞの器具等も。いくろふまらせばして。

力戎勞をる事も甚しく。又山野ふを晝は間。蜉蝣或を蚊虻などの類多くして。手足をさし疥瘡のごとくふなりて。その辛苦をきハむる事いふぞのりなし。ルシヤシヤツヽケと稱をる事ハのりルシヤとを葭戎ハのみて。簾のごとくなしたるものをいひ。シヤツヽケとを。干ハ事をいひて。簾ふほをといふ事なり。是を藏ふ入置をる穂を。食せんとをる時ふ及びて。藏より取出て。簾ふはせ圍爐の上ふて干ハ事ハり。いのなる故ふ。いとまハのる時とい〳〵どを。殘らぞ舂てそれを貯一置といふ事ハのらぞ。穂はま〳〵ふ藏ふ收め置て。食

事はたびごとゝ。藏より取出し干して。それより春く事をもなせる事なり。

春事をユウタといふなり。廣尾などいへる所は邊より。奥は夷地ゝいさりてゝ。ウタとも稱せるなり。是を前ゝいふ。圍爐のうへゝてほしさる穗を。そのまゝ臼ゝいきてつく事なり。其つく所を常ゝ小棟屋ゝて爲せる事多し。

小棟屋を。夷語ゝチセセムといひて。住居はかさハらゝ。ぶき建たる家をいふなり。

晴天は日など。家の外ゝ出てつく事もなるなり。夫

より箕むて簸事を。イトヽイといふ。簸事をそまて。其出だる糠を捨る事を。ムルヲシヨラといひ。又ムルクタともいふなり。ムルを糠をいひ。ヲシヨラを捨るといふ事なり。

ムルクタウンウンカモイと稱する事を。ムルクタを前ふいふがごとく。糠を捨る事をいひ。ウシを立事をいひ。ウンを在る事をいひ。カモイを神をいひて。糠を捨るところふ立て在る神といふ事なり。されをアユウシアマヽと。ラタ子は一種を。神より授け給へるよしいひ傳へて尊ひ重んぜる事。初めふ記せるが如く

なるゝより。凡二種ゝか〳〵そりたる物を。聊うゝても輕忽ゝせる事なる時を。かゝらば神ゝ罰をかうむるよしといひて。夫より出たる糠といへども。敢てみざるゝせず。捨るところを住居ゝかゝらゝ定め置。イナヲ幾立て。神明ゝ在る所とし尊みむく事なり。唯糠のみゝかぎらば。凡て二種ゝもの〳〵朽さる根なるを枯たる葉。其餘二種ゝものゝなづくるほどの器具を。臼杵鐺椀より初め。爐上ゝ穂を干ゝ時の簾なるを自在等ゝ物ゝ至るまで。破き損せる事なれば。ひとしく是を右の處ゝ捨置て。他ゝ捨る事決てならば。ことゝ

其破きたる器具を。水を遣ふ事ふ用ひ。及び水中ふ捨る事なども。甚ど忌みきらふ事なり。

アユウシアマ、を烹る事を。アマ、シユケといふ。アマ、も穀食ん事をいひ。シユケとも烹る事をいひて。穀食を烹るといへるものハ。夷人の境いまど飯ふなる事をバもらで。唯水ばかり多く入れ。粥ふ烹るぞうりん事なる故。かくも稱するなり。又ラタ子を食するも。汁ふ烹て喰ふ事なり。其食せんとするとき。トイタふ植おきたるをほりとり來りて。

ラタネも。熟せといへども。一時ふ殘らど堀とりて。

貯へ置といふ事をせば。植たるまゝにてトイタふおき。食をるたびごとふ堀出して用ふなり。但し寒氣をふせぐしくして。土地の氷きる時ふ至れば。やむ事ゝ得ずして。みふ堀出して貯へ置なり。

それを根葉ともふきりて。魚ハ肉とおなじく鍋ふ入れ。水をもて少しく鹽けれるるようふ烹て食をなり。これをラタネヲハワと稱ス。ヲハワとを汁ハ事をいひて。ラタネをいれたる汁といふ事なり。

をべて汁の實ふ魚を用ふる事。夷人ハ常食ふて。ラタネを其助けふ用ふなり。をのるゆ魚ふいづき魚

と雑〻烹る事ゐて。ラタネばこのう烹るといふ事も
あらば。唯根は格別ゐ大ゐるも。湯煮ゐなして食事
は外ゐ喰ふ事なり。本邦ゐていそんゐも。ゐ石菓子
などゐ用ふるゞ如し。其汁は實は助けとなるものも
も。ラタネは外ゐも。海苔なるも草等茂用ふる事なり。其草の數また多し。
右はうち。アユウシアマ〻も。本邦の事ゐ比していそんゐも。ゐ石飯はごとく。ラタネハなほ菜汁等はだと
きもはなれども。夷人のならひ然る事ゐさゞめたるゐもならば。二つともゐいづきも。饅食となる事ゐり。

はべて此等は類の飲食ふかゝそうたる事ゝ。專ら女は夷人のわざとなる事ならば。蝦夷國志

○麻を作る事

勇拂。字ツツチセ邊の畑ふ別て麻を作れり。同編卷六器械の部ふ詳かれば。就て見るべし。

○夷女畑作の事

空知太。セツカウレは家の傍ふ。狸豆眉豆粟糯粟稗等を作るたり。是皆黒唇の業れりと。彼等未ゞ鍬をもゝゞ。まゝ運上屋よりも。彼方へ農業を教るを禁め有ゞ

故に決して農具を渡さゞるべし。彼等鉞に横に柄を附用ふとなり。石狩日誌

○キナ并厚子を織法の事

夷人は織ところのキナ席を太蘭井なり。太蘭を夷名にてキナといふ。其織法を夏月蘭を刈りとり。熱湯をかけて日にさらし置て。女は細ユに織るなり。赤と黒とに染分て織をアヤキナといふ。アツシ布を。オヒヤウは木の皮を五月頃に剥取。水に漬し日にほしこのげ。細々ささ。より糸かけて梭に通し織なり。谷元旦蝦夷記行

○夷女厚子皮を製する事

婦人ハ旅行せるおも。不絶厚子皮を携へ口ゐて和そらげ歩行せ。又ハ草刈其他何業ゐても休息ゑ内ゑ。右の如く厚子皮を製せるゐ。縫仕事其他坐して出来べき業をなし。蝦夷雜書

○ツキサニ茂製し紡績せる事

蝦夷本草志料ゐ。ツキサニ一名ニイカツフ。松前方言ゐチトレタモ。此本草ゐ載る楡の一種ゐして。其葉肥大なり。夷人其皮を剥。水ゐさらし。麻皮ゑ如く紡績し。織て布を作り。是を夷中ゑ常服となせといふ。其朽たる小枝をバ。蓄置て火の用となせ。この火繩ゑごと

し。鑽燧は火もまゝ是よりとるといふ。其法も此大枝を刳て孔をなし。細沙を盛ふ枝をもて頻ふきしれば。たのづから火玆發出といふ。周禮ふ司煌氏四時鑽燧して。新火をとりて飲食は用となる。榆も百木ふ先だちてなをし。故ふ春これをとると見えたり。されば夷人といつど。其人智は會出るところかくはおとし。此木耳玆ツキサカルシと云味美なり。即榆肉藜枝審餘今清商つ祢ふ携到る千島志料

○鮭鯡等漁業の事

天明丙午の年。蝦夷國界見分御用ふ屬きて。江戸本町

苫屋久兵衛と云者の手船神通丸沖船頭太兵衛嚴命
に因て松前に着船し。夫より東蝦夷地西別に航海せ
しなり。蝦夷地東海の船路よく知たる者。松前家に撰
びよりて。松前唐津内町の者にて。水先役次郎兵衛
乘組。西別と云大川に着船せ。此西別ハ例年秋の彼岸
に至れば。川の源に方へ鮭夥しく溯るなり。予其役係
りなれば。渠等に下知して。同年八月十七日。晝七ツ時
頃引たる網に。鮭三千疋許り罹りしより。又翌十八日朝
六時に。引たる網にも大に羅る内。惡きを去り能く撰
みて九十九束なり。一束とも百なり。去るとも勝きて

小なるを去り。勝れて大なるを去り。中なるを揃へて良とせる故なり。其中なる鮭大船ふハ。凡五万足以上を積を。松前家の定例とせる事なり。日數凡五七日の内ふ捕る。是漁産の澤山なる証據なり。蝦夷草紙

生平以漁獵爲業。故弓矢不離身。獲之大利在海。三四月鯡魚聚海灣。七八月鮭魚由海泝江。十舉網可得數千斛。此其利最大者。方是時邦人亦多往而漁者。蝦性惰且拙。一日之獲。比較之邦人。大抵三分之一而已。但如捕腽肭。蝦中之絶伎。尤稱可觀。其漁之以鎗刺之。海面飛舸相逐。不及則投鎗遥空。多不誤鎗制幹首別挿刄。長繩繫其刄。

既中而幹脫。一條之繩。且任腦胸去向。伺力衰而曳之。其鎗名曰敗奈禮。又設機于艸叢間。當獸徑。獸來觸毒矢輒發。名曰打一麻子勿。蝦夷風土記

○川漁ふ犬を使用せる事

石狩。字メムとて屈曲しさる小流れ涌出る所なり。この邊の老婆。何ぞも駿犬五六疋を飼けるゞ。其故を問ふふ。鮭鱒等此川ふ溯るや。男夷ハ括槍ふて突ども。老婆ハ其槍ハ遣ひ難きゞ故。犬ふとらせと云う。折能くも今朝も鱒鯇等多く溯りし故。是を一見せしゞ。犬も川岸ふ隱居ふ。鱒川下より淺瀬ふ至るや。犬飛込て直

ふ頭を咬て持來る。必ず外に處ふ疵を附る事なし。其馴しらさ甚行義宜敷ものなり。依之此邊の老婆ども。犬を大切ふし我が喰はる毎ふ。食を分ち與へ飼置たり。鮭漁の頃ふ一日ふ四五束づゝも取獲となり。石狩日誌

○イシヨニをもて海豹を捕る事

唐太夷人海豹を捕るふ。イシヨニと云もの有り。其製丸き木を二つふ割り。長二間ほどなるを七八本組て筏とし。碇を附て海中へ浮べ。陸より四五十間も沖へ置なり。それより細き木の目板の如きものを幾本も繋ぎて。其木へ昆布を巻き。木と見えざるやうふし。陸

ふ身を隠して。木ゝ端を持ち居。海豹ゝ筏へ上るを待て。目板と昆布の間へ縄を通し。縄の端へ鮭鱒を突く如きゝ鈎を附けおき。海豹筏ゝ上れば。其木ゝ筏の前へ向を待て突き留るなり。是ゝ我イシヨニと云ふ。追要分界

圖

○ヤスを以て魚を突事

魚をつくゝふハ。ヤスといふものをもりて。鎗ゝ如くゝつらふ。常ゝこれをそなへ。其業甚上手ゝして。海底ゝヤスをなくるゝと妙ゝしてつくらびといふ事ゝし。大魚を一ヤスゝてとゞまらぬ故ゝ。追ひ突とて又

一本を投けて。突とめる事あり。北海隨筆

○牡父魚を捕る事

土人の牡父魚を捕るは。楡皮衣を川の瀬に裾を上に。肩戈下にして敷襟の所を持上居る。魚水に從て流き來るや。水は兩袖よりぬけ。魚を背に留るを捕るなり。其早き事恰も小石を拾ふごと思ハる。其捕方城州加茂川の鮴押と同理にして。彼を筵を二枚合せ其上に追上捕る。是を着たる物を脱ぎ直にそれにて捕るなり。無雜作にして又奇れり。夕張日誌

○腽肭臍獵の事

腦胸臍を獵するゝ。長万部よりエトモといふ處まで。六ヶ場所。一場所ゝ一艘二艘。まゝえ三艘と極り有て。其所の役ゝして。冬至より翌二月迄の内。海上波静ゝして穩なる日を撰み。其場所々々より極め通りの船數を出し。是ゝ武デハ船といふ。究竟の男夷一艘ゝ三人宛乘組。大洋へ出櫓櫂を止め。煙草をも呑ず。至て静ゝして海面を守り居。いづ方より出る船も同様ゝして汐風ゝ流るゝ時ゝ。手を以て水をかき。獵場ゝ離さざるゆういとし居るなり。ゝこの處腦胸臍ゝ穩ゝ乘じ。水上へ拾足ゝ二十足ゝ。浮びつ躍りつ遊び居。頓て眠

を催し熟睡して。其中より一つ二つ汐風に流れ出る
球。夷人是を見つけ猶静にして。犬躰七八間にもなれ
バ。ハナレ
但夷語にハナレといふ。やはの事なり。
を以て。投突にして是球捕るなり。最初ハナレを附し
夷球。勝負は夷と唱へ。夫より二は夷三は夷といふ。褒
美に高下有。尤價も右に准じ分け遣はす事なり。松田四六筆記
○キナンボー魚を漁はする事
幌別白老邊にキナンボーといふ海獣有是球漁して
油に絞則レメキナンボー油と唱へて出荷物なり。此

キナンボーといふ。形ち龜なり。大きさ凡そ疊三疊敷。なるひろ二疊敷も有。是を漁せるふね。夷舟ふて夷人兩三人づゝ乘組。沖合へ出て。右キナンボー見附次第。ハナレを附て漁し。舟ふ引付置て。夷人どもキナンボーは甲ふ乘。腹を割臓腸油をとは類。殘らず舟ふ取入き。夫よりイナヲを削りて。腹は中へ入き其儘放つと云。一日ふ二つ三つも取獲。前の如くして放せと。右はキナンボー助命して。ふゝ度とらるゝ事有といふ。腸膽を抜きしものゝ助命せべき道理ふく。信用しがさゝれども。夷人は語るを聞くふ。二度め取らきしゝ。

入れ置しイナヲのなるといふ。其上キナンボー油と
て。出荷物ゐ出る程の死骸。如何様ゑ時化大波ゐても。
一つも海岸へ打揚ゑ寄ゑし事。昔より聞ぞと支配人
番人抔もこれを云ひへり。不思議成事なれども。聞ま
ゝゐ爰ゐ記ぞ。又勇拂邊ゐて漁ぞるもの一種ひり。是
をイテンゲといふ。是則龜ゐて夷人食料と出。甲ゐき
つこうゑ形有て。磨上と鼈甲の如くなり。是を白鼈甲
といふ。同上

○鰈鮫の事

松前志ゐ。鰈鮫是尋常ゑ鮫ゐひらぞ。此魚西部夷地天

鹽。勇拂邊ニ別て多し。方俗これを蝶鮫と云。菊花蝶形顯然たり。當今は士人佩刀は飾とし其鞘ニ用ふ。美觀ニして又武用とせるニ足れり。夷方是ハ鮫カリマといふ。此物享保二年有台命。而呈上せしなり。夷人此魚胞を以て。鰾膠とせるニ其妙甚し。又一種シモツサメといふなり。大和本草ニカセツカといへるもの。即されなり。千島志料

○漁獵時節の事

一鮭ハ海ニ育て。秋は彼岸より子孫うまんとて。川ニ登るなり。鮭は最上ハ石狩增毛留萌。此邊ハ彼岸は

初より凡二回程して終るよし。一ヶ年ハ夫より遲く彼岸中頃より初め二回も取あぐるよしいづれも挽網にて捕るといふ。石狩川より南北方勇拂へ川續き此兩所鮭多く取あぐる由なり。

一鱈。冬至より蛸此餌にて。初め凡廿四五日も釣よし。まゝ鱈少き年ゝ三十日餘も釣。共餌にても釣れるなり。根田内より白尻まて此場所を。鱈場所と唱へ。就中椴法華ハ鱈の最上の由。此處の鱈をもて獻上に供ス。

一鱒。國後擇捉鱒此場所にて。多分の漁獲あり。漁事

を六月中盛と云。多く土用入頃より取初め。三十日程も挽網にて取つぐるなり。

一鯡も。熊石村より石狩迄を。古來鯡此場所と云。春此彼岸前より初め。四月中頃迄引網にて取揚るなり。まゝ夏よりかけて。中秋までに鮑煎海鼠の漁業をもなし。或は昆布切りに立廻る者も有なり。

一鰯も。いつといふ事もなく。寄來次第に網を入れ。取揚て油に絞るなり。干鰯も製せぎといふ。

一鰤も冬至より春ともに釣。又濱和なる時。假法華にて。網にても取ると云。いづれも巖石多き所ゆゑ。

多分ハ釣取る方なり。
一カスベを。春の彼岸前後鰐餌ゐて釣り。又共餌ゐて
も釣なり。
一昆布を。六月土用前名主の鎌入をなしてより。一統
採り掛る。七月中を採揚るなり。
一鹿を。沙流會所の山より出るもの多く。秋より冬向
許る。蝦夷人の業として獵をなり。最他の山ゐも居
るといつども。秋迄ハ間を海漁忙敷事故。此獵をを
べき隙ゐし。又冬の皮ならでを毛抜て不用立故。此
獵もせざるなり。沙流會所ハ山を。南面ゐて暖氣故。

冬向此山へ鹿自然と集来るなり。毛皮一枚代金一分程ニ賣拂ひて。一ヶ年凡三千枚も獲もの有るよしニ聞も。

一熊ハ。擇捉ニて一ヶ年ニ十疋餘取よし。是又魚猟隙なき故。常ニハ獵せず。又冬皮あらでハ毛拔て不用立故。取ざるあり。

一鷲鷹ハ。地上ニ横木を設け置。其下ニ小鳥を縊り附置。挽網を雙置て。其小鳥をとらんと横木ニ止る時。網を引てとる。皆蝦夷人此業とする所なり。

一干鯡ハ。鮮魚をマキリ小刀ニてさきて。腸類をさり。

干立製をるおと。蝦夷人も和人も仕方を同じ方なり。松前秘說

一夷人は稼方ハ。男女共春を鱈を釣。夏ハ鱒漁秋を鮭漁。冬ハ材木并薪を伐出し。又雪中鷲熊抔とるなり。漁業は間ゐキナ筵抔を織るなり。

一毎年春ゐ至り氷海解て。四月頃より夷人の内。得撫チリホイマカンルゐ渡海して。獵虎を取。七月頃歸國を。惠登呂府志

秋味漁業は時節を。彼岸ゐ入。夫より土用中漁盛なり。其後蝦夷人共飯料の爲。川筋ゐおひて勝手次第ゐ漁

事ヨリ。西蝦夷地場所ヨリ申上

○昆布をかる時節の事

昆布とり。六月土用より八月十五日まで採きり。

續日本紀曰。靈龜元年十月丁丑。陸奥蝦夷第三等邑長志別君宇蘇彌菜等言。親族死亡子孫數人。常恐被狄徒抄畧乎。請於香阿村造建郡家爲編戸民。永保安堵。又蝦夷須賀君古麻比留等言。先祖以來貢獻昆布。常採此地。年時不闕。今國府都下相去道遠。往還累旬。甚多辛苦。請於同村便建郡家。同於百姓共率親族。永不闕貢。並許之

蝦夷土産

○冰海漁獵の事

天明六丙午年三月中旬ゐ國後島ゑ内イショヤと云所ゐ着船して小屋をこのけ野宿せしゞ其夜丑寅の風烈しく吹けきバ水主の蝦夷人共云けるハ海上真白ゐ見えて氣味惡しと云けきども何の故ゐも志らゞ其夜明けて翌朝ゐ海上を見れバ遠沖より一面ゐ冰の山となりけり其冰の厚さ五六間乃至十餘間或ハ二三十間許ゐもゆりて海上ゑ冰面より五六尺餘も浮み上り水下へハ何程厚く氷りたるゝ誠ゐ堅氷山となり此冰皆々北海より吹寄るときハ大海更ゐ波

浪なし。因て通船さる事能ざれば無據滯留せり。土地の蝦夷人。其氷より氷に飛移りて。遥の沖に出て。海鹿海豹等を捕る事夥し。堅氷追日漸々に解散に赴く。北海獵を止て。深山に入てかせぐなり。赤熊の栖を見つけさきば。主人イコトイウタレに下知して。赤熊を射留たり。皮を剥肉を取膽を取骨を捨て。悉く料理して。荷物に作りウタレに負せ。扨又彼跡に子赤熊三疋居たるを生捕て。主從大勢深山より濱邊に降りける時に。其体を彼大熊が皮と肉とを分ちて背負。生捕小熊三疋を引連き。蝦夷の例にて。野宿小屋を遥に向に

う聲をはり。ゴヾキセとて。哺哺々々と云なり。ゴゴキセの聲高く聞えしのバ。蝦夷女ども迎ふ出て。獲物の熊なるを見て。野宿の假小屋俄ふ窓を開き。其赤熊の首皮を尊信して。此窓より入て上坐ふ安置し。後我耳環をはづしく。彼赤熊れ耳ふかけ。太刀を首皮の真向ふかざりて。いのふも恭しく尊崇して敬ふヾ。蝦夷地の定例なり。其故を熊ゑ靈獸なれバ。魂魄化して。蝦夷土人となる故なりと云へり。鹿肉魚肉等の供物をして。尊貴の人ふ對ゑるヾ如く。恭しく再拜して。其後ふ其熊の肉を供物ふゑるなり。其故を尋るふ。魂魄ゑ殘

るものなり。彼の肉を借りのもれなれば。心と骸とを別物なりと云り。此定例濟て眷屬は蝦夷人共打集ひ。肉を煮たり燒たり。生ふても喰ふ。熊の肉を食せるゐ禮式なり。鹿肉狐肉等を喰ふとハ。大ゐ別なりと云ひ。此振舞終ひて頭骨を神靈ゐ祭るなり。扨又其子熊をハ甚寵愛して飼置。成長の後ゐ熊を殺して神靈ゐ備ふるなり。是を殺せゐ禮式なりて殺し。其肉を喰ふて酒宴致なし。大祭禮を行ふゞ恒例なり。蝦夷草紙

宗谷會所前海。戌ゐ向ひて。フサブの崎へ差渡海上三里程。濱手通り陸を廻りてハ六里ほど有て。入灣ゐあ

りたる所なり。海上寒前より磯へ氷張る。厚さ一寸より二寸位なり。陸通りも一尺ほど張るといふ。春過東風吹て。唐太嶋の方より。山の如く氷一度に押來る。其時も宗谷より利尻迄十八里海上并禮文の方まで。海上一面に氷山のごとくなり。其時氷の上に水豹乘居る故。蝦夷人ども氷の上をもしを歩行。水豹を獵とるなり。ヒカタ西南の間の風吹一度に氷下地斜里の方へ流迄行なり。去亥の春。宗谷須のうち。サロル雄別トウベツ常呂。右四ヶ所の蝦夷三百人ほど。水豹をとりに出。難風に逢て一時に氷にうたれ。一人ものこらず死せしと。

尤右の水豹取ふ行ときも船ふ飯糧并薪水等も用意し氷の上へ船を引ちげ丸小家を掛仮住居をなし水豹みゆ迄バ矢を放し又もヤスといふものふて突留る事なり。夷諺俗話

○獸獵

○他郡山獵の事

山海の獵漁たるや大略一郡或も二郡ハ分界ちり他の郡へ出稼もるを不許と雖ども山獵の如き日高十勝兩國より石狩國へ密々熊獵ふ至るものちり志ちれども其地の土人これを見咎る事ふ於ても應接上

其皮を可受取權ありの。無言にて決して取去る事なし。

蝦夷雜書

○桶もて狐を捕る等事

十勝の土人セツカウシを。一升入の油樽の古きを有しを持來り。是に三寸釘三本を三方より打。裏の方に投置しに。其夕方狐一疋を獲來りて我等に饗しぬ。其捕方桶の中に油臭きを故。嘗んとて首を突込や釘を首にかゝるを抜ざる時。かくを居て打ころはなりと。

南華主人のいへく。洋人が猿を捕んとするに。壺に黐を塗り置き。獵者黐のなき壺に顔を入れ被り。

踊りて見せれば。野猴きたりて。黐の塗たりし壺へ。頭を入れてたどらんとせるや。黐おて眼を閉ぢ。周章るところを捕ると。（子ーランド第二十九號）その手段彷彿たるも。亦奇とせべし。（十勝日誌）

○夷女獸獵の事

蝦夷地のならひおして。婦女は業おも鹿狐狢獺の類。犬おて驅出し獲れば。即其場お皮を剥ぎ肉を解きて歸るなど。野山を奔走せるおとハ。男子お劣らぬそうらきなり。海上お艪櫂を搔き山林お薪をこるも。皆婦女の持前なり。（東蝦夷夜話）

○穴熊を捕る事

夷人等冬月漁事終きバ。深山をめぐりて。穴熊のるを鹿狐獺鷲その他の獣。又海岸へ出て。海豹海驢等を捕るをもて生業となを。そと會所へ持出て。米酒麹煙草木綿糸針あどゝかふる。これを狩物とりといふ。固より會所最寄ゝ住居をる夷人を。山ごもりハあさて。會所向ゝ用事を達を。されども狩物とる我申しつけらるきバ。山ゝ入りまゞ穴熊を捕らんとをるゝを。二人或ハ三人つきだち。何れの家ゝも平生畜おきたる犬ゝ中ゝも。強く逞き我えらみて。五六疋づゝ牽ゆき。山

中ニ分入て。熊ハ穴とおぼしき所を。たしかニ見定めおき。穴ハ口許へ丸木をもて横竪ニ柵を結ひ。志のして其隙より毒矢を射こむ。熊ハ穴中ニて吼怒り。口をとへ出來り。結ひのらげたる柵を引除けんとして。おの逃ぐかゝへひくニ。丸木ハ上下左右ニ支へて。かひやる事ならねば。外面へおし倒さといふ智ハならぬものなりとぞ。其うち矢ニ仕ラけゝる毒ハ。熊の皮肉ニめぐり入り。弱る所を夷人ハ込み入り。急所を狙ひて打殺し。穴ハ外へ引ずり出るニ。まゝ死もゆらで狂ひ出るもなり。其時ハ牽ゆきゝる犬。一齊ニ飛かゝり

咬つのんとなり。まさに矢傷急所ならで手負となり。夷人を目ざして追ひ來るに。夷人をあまたぞ一生懸命に場として。頻に犬を驅らくる。熊を數疋の犬にとり圍まき。のしらひ兼てゐるうちに。夷人を其場を逃延る。熊を人に姿を見失ひてハ。もとや追ひも來らぎとぞ。夷人を固より驍健にして。こまらごとない事ともなさば。其時熊を仕損ぎまを。まさ他の穴を搜しもとめて。竟に夷を得ぎといふまとなし。東蝦夷夜話

○鷲を取獲るの事

擇捉夷人の鷲をとるを聞けるに。二月頃堅雪に節。深

山に入て。雪穴を堀。木朶をもつて是を覆ひ。人形は不見様に。穴中に隠れて。其前に餌を置き。飛翔は鷲此の餌を見て。一つとり餌を食して居る節。彼雪穴より是を窺ひ見まして。曲鈎を鷲は足へつげ引取得るなり。此鷲は羽を下蝦夷地第一は狩物なり。熟多羅拂談鷲は巣おゐしを取て。おやに入れ飼置て。尾をぬきとりて交易をなり。鷲を奥蝦夷に多し。又石狩川は水源に。夕張といへる大山にのりて。巨樹をげりて冬より春に至りて。雪は積りたる時ならでを事れやがをし。此山中に鷲鶴など多くをみて。巣をつくるなり。此山へ

諸方より夷人ども。雪中ふいたれば。まけ入て獵をするもの。千餘人ふおよぶといへども。さらふ其同行ゝもものより。外ふ出逢ふものなしといふ。其山ゝ廣大なる事ゝ知るべし。北海隨筆

○夷家鳥獸を飼ふ事

シユマ、ツフゝ夷家ふ。羆熊を畜ふなり。又梟を畜ふ者なり。梟を養ふゝとゝ。此地の習俗の由。相傳へいふ。此梟生々ゝ理を教へしこと。本邦ふいふ鶺鴒の如きものふて。子孫繁昌の基なりとて。愛養をと云り。觀國録

千歳字シキウ村乙名ゝ家ふて午飯をゝ。乙名ゝ名ゝ。ヤ

ンゴロといふ。家も廣し。貝桶おど多く持たり。鷲は飼たるなり。木は葉を四角ゐ積。其内へ置。鷲の名をカハツチリといふ。ヤンゴロは家ゐ。大刀五腰なり。古色甚愛とるゐ堪たり。谷元旦蝦夷紀行

○山獵ゐ犬を使ふの事

蝦夷地の犬は。夷言ゐセタといふ。夷家ごとゐ犬を飼置。山獵ゐ出るとき犬を多く連行。熊を見請さる時は。矢を放つゐ。やゞて其熊夷はりさへ飛來るを。犬ゐ吠かゝ。熊のうしろへ回り尻へ喰付故。熊も立戻り犬とかみ合とる内ゐ。二は矢は射留るなり。

宗谷運上家より。五六疋飼犬有。其内老犬より狐色なる犬を。よくものをくぞへるなり。何よりも手ごろのものをくをへさせ。連歩行ふをさぶひ行なり。一体蝦夷地の犬を人なれなて。白犬より一疋よくものをくをへ歩行犬有。會所番人のうち。支配人長三郎忰長七といふもの。右の白犬を連。宗谷運上家より一里餘。シルシと云處へ行。歸りのせい道より火打を落したりしゞ。其夕かゝ右は犬。火打を拾ひくをへて。運上家へ持來りたる。且右の犬ども浜濱邊へ連出し。石をひゐひて海上へ礫を打ふ。その小石は落さる所へ。およぎ

行。又一つ外へ礫をうてバ。まさ其所へおよぎ行なり。又予よよく馴染たる犬三疋ありて。外へ出きバ付まとひ歩行。夷船よ乗ゐて海へ出れバ。やゞて飛込船の左右よ游来。長き海上なれバ。終よゝ犬も游草臥。息合も苦敷様よ成故。首筋を捕て船ゟ舳先へ引上げれく よ。うれしゞりて尾ゟふり居れとも。身ぶるひをせぞ。身ぶるひ致せるときゝ。船中もあハゞ困る事ゆゑ。乗合居たるものも。定めて身ぶるひをせべきといふゆゑ。犬よむこのひ決して身ぶるひをいたせゝと。戯ていひふくめ置しゞ。船ゟ岸へ着迄身ぶるひ致せぞ。いい

も海をおよぎたる時。陸へなのれば。是非身ぶるひ戦
はする事なるよ。船中よて右のごとく。言含めたるを間
分て。急度守りをるを。誠よ感さることなり。夷諺俗話

○鹿種類の事

松前志よ。蝦夷産の鹿ハ。悉く麋なるべきゝ。方俗カノ
シヽといひ。夷人ユックといふ。其皮ハ他國と交易はて。
夷人好て其肉を食ひ。又其生體を吸食ふ。又希よ白鹿
なりといふ。夷方白鹿を神となし崇むなり。古人此を
祥瑞社部よ入れたり。これを仁鹿といふ。又日本紀よ
齊明天皇社朝。蝦夷を征伐なりし條よ。夷人白鹿を唐

天子ニ獻せし事見えたり。又列仙傳ニ百年ニして化爲白鹿といふ。是希有ナ物なれバなり。千嶋志料

○唐太夷産業の事

一嶋夷の業とハるところ。海漁ニ蝦夷嶋ニ異なることなく。鮭鱒鯡其他雜魚を漁ハ。此魚殊ニ多く春分頃群集ニるニと數度なり。其時ニ海面一色ニ白くなるニと米泔ナ如し。夷等其趣を見得て。是を漁ニるニ纜網を以てハ。其得ること甚多し。又夜中ニ火を點して。海岸ニ漁ニることなり。

一山獵モ又異なるニとなしといへども。獸皮を以て

山丹夷。或ハ滿州ニ交易ハること。此島夷ハ專務とハるところなれバ。男夷專ら是を勤むる事なり。

一ホイヌを獵をるハと。本邦のそねをハ異ることなし。只木ハ横面ニ設け獸を得る時ハ。水ニ投ぜしむることをなハるハと巧とハ。

一リキンカモイを獵をる事。亦弥を設けて是を護る。

一トナカイを獵をる事ハ。熊獵ハ如く弓鎗を以てハと云。

一狐を獵をるハ術ハ。枝木を建て其上ニ魚を掛る時ハ。狐魚を羨て木を攀ぢ上下ハる時。足此枝間ニハ

きまれて終ふ得らるると云。此他狐を得るは術種々
にあり。
一獺を獲るふハ。自發弩を製し河邊ふ置。獸來て垂糸
は魚をひく時ゑ。弩おのづから發して。獸を得るな
り。
一グーアマと稱する獵器にあり。是亦自發弩なり。山野
獸路ふ設置て。熊狐の類を獲る。蝦夷嶋ふあるとこ
ろは物と異なる事なし。
一熊を獲る事。亦蝦夷嶋と同じく。毒矢を用ふといつ
ども。其毒蝦夷嶋の如く。其効を奏せば。ゆゑふ矢を

放つて是を中るといつども。獸忽ち斃れざる時を。何地までも是を追ひ。數矢を放て是を獲る。北堺夷圖說

○唐太夷産業は犬を使用せる事

一此島の夷。生産の第一事となせるものを犬なり。貧賤なる夷を。其失費は堪ざれば。是を養ふことなしといへども。富貴の者は。家々是を置ざるものなし。

一一家養ふところの犬。大抵五六頭より。十二三頭に至る。

是其用をなせるもの。此他壯犬兒犬の類。絆養せざるもの猶多し。

其生平飼置所を。庭砌ゝ木を建。横木を結び。一犬毎ゝ是を繫ぎ。漫行せざらしむ。若其犬病ゆるゝ。又ゝ精氣の虛脫せしものを。繩を解て隨意あらしむ。嚴冬積雪ゝ時ゝ至るといへども。皆かくの如く。別ゝ牢を設るおとを見ば。

一犬をして食飼せしむる事。其詳あるおとをきらば。といへども。大抵一日中。一二度なるべし。生魚ゝ肉を食せしめば。煮熟して三マムと稱せる木器ゝ盛り。二三犬をして同食せしむ。然れども犬を放つて自ら食せしむることなし。其時を夷自ら絆繩を解

き。是我曳て食物の所に至り。食し終るに間杖を以て其後に立。其奪食咬嚙せる者を撻て。妄凌ぎたいとなららしむ。

一犬兒を養ふ事。繩を以て繫ぐこと初めことし。食餌も又同じとい〳〵ども。魚骨を去て。肉のみ小く裂て。是を食せしむ。

一此他大犬小犬に限らず。撫育の懇到なるたいと枚舉べつらぜ。實に小兒を養育せるゞ如し。故に犬の夷を慕ふことも。亦嬰兒の母を慕ふゞたいとく。晝夜其側を離るゝたいとなく。夷等に側に伏さしめ。椀中

の物を分て是を喰しめなどせる樣も。實ハ禽獸と同居せと云べし。兒夷の嬉戯多く犬を弄し。人の兒を負ふごとく。衣中ハ入れて是を負ふ。犬兒も亦晏然として衣中ハ居り。是亦愛育の狀を察せるハ足きり。

一兒犬漸ハ長じて後。其猾猛なる者を撰て家狗とし。其懦弱ハして用ハ堪ざるもの。或ハ牝犬ハ小懦ハして。乳せしむべからざるもハハ悉く絞ヲ殺て其皮を取り肉を喰ふ。

一犬兒漸ハ長じて後。甚し紀滝犬ハ。悉く陰囊を破ヲ

て。その精を去ること騸馬のごとし。是其妄淫を禁し。其筋骨を強くせしむると云。

一精を去るの方ハ。犬の四足を木ゟ束縛し。又繩を以て其口啄を巻き。両三夷是を擁して。動揺跋躍せざらしめ。一夷刀を以て陰嚢を裂き。其精を出して是を去り。直ゟ繩を解きて是を放つゟ。犬痛傷ハ趣なく。暫時其刀痕を嘗め。忽然として走て去る。其後常ゟ異るゝとなし。然れども妄て是を去るゟならば。天時を考へ其狗の生質を按して是をなハ。若其截割ハ術拙なる時ハ。即死せる者なり。故ゟ此事ゟ

熟練せざるは夷も。是をなほことを得ば。林藏其詳なるゝとを聞ざれば。其方を述るゝとを得ば。其用ふるところハ。艢を挽しむるを第一とし。又船を牽しめ。山獵を助く。艢船とゝゝ其馭法大ゝ巧拙ゝり て。拙なるものハ。漸く四五足は犬を用ひ。巧なるものも八九足十餘足といへども是を馭せ。此島の犬を見るゝ其性本邦は犬と異るゞ如くゝし。物を挽くゝとを悅ぶの性ゝりと云。艢舟ゝ限らば挽しめむと欲せる時ゝ先犬を連繫して。立木ゝ繫ぎ置き。

牝牡ゝ論なく。綱をつくる時ハ。忽ち前行して挽曳

ハ。故ニ三四頭を連繫セる時モ。一二人ノ力ヲ以テ留ベシならば。故ニ木ニ絆ハ。

裝スルノ内。既ニ連挽セるコトと頻ニ為シテ。聲を發し跋躍ハ。裝成テ植木の繩を解を待ばして。馳出ハコトと矢の如く。一艝七八頭をして挽ムる時モ。一日中十七八里を馳セベし。

一馭術モ。兩手ニ木杖を持テ。艝の上ニ踞し。犬疾馳傍行セる時ハ。トウ〳〵と云聲を發し。艝觸る〳〵處の

る時モ。杖を地中ニ刺して是を留む。海岸の氷地を馳驅セることなる故ニ。碎氷まゝ其上ニ磊々とし

轉びたる時は。艙常に動揺いること甚し。故に暫時の間も。目を放ち心を安ぜるのひまおし。一度其馳を誤る時は。艙忽に轉覆して。其身雪中投し氷上に傷るのみならば。艙は何地へ行き。幸に木は根。岩角などにかゝりて。其艙轉滞して。如何程に引といへども。行べからざるさとなるに。あらざれば。留るさとなし。其幸にして留りとるも。艙を悉くやぶれ。積むところはものを。總て破却し。繩は衆犬の足にまとひ。漸にして追付。其處に至り得るといへども。是我修理出るさと。容易は事にならば。林藏時々犬を馭

してみづからこの艱苦を知れり。

一舟を挽しむるも。亦大抵如斯といつとも。其心を勞せるさと頗少しといふ。

一多力猾猛なるものをして。能挽曳せさとを馴れたる犬を。連頭に置て挽しむる。是を名付て前導犬と稱せ。島夷此犬を擇むことを專務とし。此犬のしき時を。衆犬逸して其用をなさず。故に是を交易するさとなるに。其價大抵斧三挺より高價の者も五六挺に至る。

一島夷を近所に行といつども。とくらしたところの雜

一器にる時ハ。悉く舶ふ積て。犬をして是を擇むことなし。犬弱く路難ふして挽得ざる所ハ。夷等助け引て其所ふ至る。

一山獵ふ用る時ハ。能猛獸と鬪ひ。深山幽谷ふ入て諸獸を追出し。夷等の助けとなるゆへ。枚舉にいとまあらず。

一家狗ハ病みて死ぬるものハ。只其皮を取のみふして。其肉を喰ハず。北蝦夷圖說

唐太夷人ハ犬を使ふ事。内地の牛馬を使ふようも巧みなり。其犬を仕込ふハ。初め狗子ハ時より。良犬と駑

狗とを相して。若干の代を以て賣買せ。犬は陰嚢を切
て去り。馬は繫ぐ如く。常に兩方へ杭を立て。左右に繫
ぎ置なり。其舟を牽き海鱸は皮を細く割て繩は如し
し。是を夷言トナリと稱して。犬は頭へ結つけて。内地
の引き舟の如し。舟中に八船頭夷人のみ乘りて。衆
犬を鴈行して海濱を走るなり。其制犬の頸間へ輪を
をめて繩を掛け。四五足まと六七足も珠數つなぎに
連ね。牝犬一足を輪ををめぎして放ち行て。水先とな
さしめ。船頭夷人其牝犬を指麾せれば。牝犬則聲をな
して先たち走る。是を見て衆犬みな隨て走るなり。凡

十丁ほども行けば。牝犬又自聲をなして走る。衆犬また隨て力を用て走るなり。幾里ばかり間も皆如此。海岸岩の出崎ゑ至れば。衆犬皆海中へ游ぎ入り。折旋して崎を廻るなり。左なければ出崎の磯へ舟つのへて。進みがさきゞ故なり。一日行こと凡七八里。犬は智も亦奇なり。初め舟ゑ駕せんとする時も。船頭夷人繩を手ゑして犬を呼べば。衆犬みな走り來て頭を揺し。尾を掉り繩を受るを以て快とするもの〻如し。又唐太は犬を内地宗谷へ渡して。試ゑ物を牽かするゑ牽らば。宗谷は犬を唐太へ渡せば。能衆犬と同じく物を牽なり。

守重按ふ。北海道。女直邊ハ。皆犬使ふ事なりと見ゆ。蠻書ふもその圖を載たり。

露西亞人アタムスヲワシア國ふて。冬ゑ雪橇ふ乘て往來す。橇ゑ犬ふひらせるなり。犬ゑ皆尾と陰囊を切る。如此せれバ精氣おとろへぜして強しといふ。邊要分界圖考

唐太ホロコタン邊。犬を飼ふ事蝦夷ふ異なることなし。唯犬の氣象猛悍ふして。他邦ゑ人を見れバ。猙獰咆吼して喰ひ付んとせるゑ勢なり。瘦て犬高しウシヨロ邊の犬と同じ。鎖鎖を以て木ふ結付け置く。

犬を繋ぐを。馬の外繋ぎは如く拵つ。十疋を一所よつあぐなり。

此犬を舟を牽き。艙を牽くは用よ備ふ。余等一日舟を牽かせんかとを見んと。番人へ談じたるよ。番人其旨を夷人よ傳れば。夷人早速承引し。前濱よて引かせたり。其仕様を。夷船一艘へ夷人二人我等四人。外よ犬を扱ふ爲め。附添は役夷ケラヱ一人を載せ。

此役夷綱を手よ取ヨて。犬をのやつること。御國人の馬を御せるが如し。土夷二人舟の舳艫よ立て。舟を扱ふなヨ。

扨舟は舳先は方へよりたる處は横木より綱を出せ。其綱の先に先導犬を。

その綱長さ二十間許にして。トドノ皮を用ひ。犬中にても強悍壯犬なる者を用ふ。

括り付。其本綱へ小綱を十一本。四五尺置に結付。夫へ犬を括り付ること十一足。先導犬共十二足にて。

先導犬は直行し。子犬は左右に行く。

舟を挽曳せ。初めは徐々に引き出し。追々早く。遂に疾走せること箭は如し。

此緩急。御者ケラエは操縱に從ふなり。

濱邊を奔ること十五六町。暫時ゐ往來し。たゞ舟を海岸を距るゝと。水は深淺ゐをよれども。大抵五六間三四間ゐ過ぎ。犬を始終水際を走るなり。

ケラエ曰。此節ハ犬を使えぬ時節。殊ゐ暑氣のせいゐて。犬も甚疲るゝ故。行き止をゐて一息を入れさせ。戻り格別早くせんとの事ゆゑ。其通と申たり。

元は處ゐ歸り。犬の括りを解き。外繫ゐ入る喘猶急なり。於是犬ゐハ鯡魚を與へ。夷人ゐ清酒を與へて。聊其勞を報いたり。觀國録

唐太東部。タライカ。ヲリカタ邊ゐ。トナカイといふ獸

なり。鹿の如くにして。丈け高く頸長く。腮に四五寸ばかり毛なり。班文なり。角を平めなり。此獸能く物を牽く事牛馬に如し。雪中に夷人兩足へ橇を着く。其橇は木にて巾六七寸長さ四尺許。鼻を反らして。裏へ海豹皮を張る。左右に縁へ鯨に骨を鋲にて打堅め。滑にして走易からしめ。草鞋に如く。革緒にて足へ結ひつけ。扱手に八捧を持て。左右へ互に突張り。舟の楫を取るが如く。其身の帶より繩を出して。トナカイに頸に結つけ牽らせるなり。一日雪中凡二十里を行べしと云。舟に帆を持て走るが如く。瞑眩せるほどに覺ゆと夷人云。

按ふ元志ふ。木馬ゑ形如彈弓。繫足激行。可及奔馬。止可氷雪上行と云。盛京通志ふ。外蕃鄂羅春其稜の地方。不産牛馬。多役鹿以供負載性甚馴と云。清實録使犬といつるも。みな此類なるべし。邊要分界圖考

蝦夷風俗彙纂後編卷四 終